

## 日本人がかかえる英語の諸問題: 研究に必要な英語教育・政策・国民性

島谷健一郎 (統計科学専攻・准教授)

### 開催趣旨

日本人はなぜ英語ができないか。あなたは英語で戦えますか。

科学研究に従事していれば、分野を問わずこうした問題に直面する。英語については、既にたくさんの書籍や論文で論じられている。鈴木孝夫は、専門の言語学に途方もなく広い視野加えて冒頭に対する回答を文献 1, 2 の中で提示している。元統数研所長の故林知己夫氏は、統数研の「日本人の国民性調査」の結果に基づき、英語と「日本人らしさ」について考察している(文献 3)。「英語学習は早いほどよいのか」を考えると(文献 4)、行動や心理の実験や入手可能な教育データに基づく(文献 5)推論、さらに脳科学も関わってくる。政策として国語と外国語をどう調和させるかは民主政治の根幹と関わる(文献 6)。「地球上には多様な言語がある」「外国語が固有文化へもたらす影響」は、生物多様性や外来種の侵入といった生態学を踏まえた考察が望まれる(文献 7)。

日本人がかかえる英語の諸問題は、学際的に原因を考え対策を講じることが望まれる。本研究では、「研究者が有すべき英語力」という(院生も含め)誰もが直面している問題を入りに置き、英語について学際的に考える。

### 引用文献

1. 「あなたは英語で戦えますか」 鈴木孝夫著 富山房インターナショナル
2. 「日本人はなぜ英語ができないか」 鈴木孝夫著 岩波新書
3. 「日本らしさの構造—こころと文化をはかる」 林知己夫著 東洋経済新聞社
4. 「英語学習は早いほどよいのか」 バトラー後藤裕子著 岩波新書
5. 「調査観察データの統計科学」 星野崇宏著 岩波書店
6. 「英語化は愚民化」 施光恒著 集英社新書
7. 「生態学における英語化を考える」 生態学会大会自由集会、大会予稿集 P99, 2016年3月、仙台.

### 議論の概要及び今後の展望

#### 第1回: 6月14日 15:00-17:30 統計数理研究所

文献 1, 2 の著者・鈴木孝夫氏を招聘し、会場からの質問に応える談話会を企画した。

著作の題名そのままに「日本人はなぜ英語ができないか」という話題から始めてもらったところ、その回答は、いきなり2時間にわたるものとなった。その後、会場から5

ー6つの質問を受けられたが、結果として講演会+質疑という形式と、ほとんど変わらないものとなってしまった。しかし、話し始めたら2時間止まらない姿こそ、まさしく鈴木孝夫氏であり、90歳に達する人が日々新しい知識やアイデアを取り入れ、昔の成果でなく、昨日気づき今考えていることに熱弁をふるう姿は、参加者に強い印象を与えた。以下に、主催者の主観と独断により、講演のごく一部を抜粋する。

概して日本人は、英語を母語とする人のような発音やイントネーションで英語を話すことに憧れ、それができる人を「かっこいい」と思う。しかし、「アメリカ人のように英語を話したい」のような漠然とした目標意識で英語を勉強しても身に付かない。一方、非英語圏の人の多くは、仕事で必要だから、英語力があると収入が上がるから、などの具体的な目標を持って英語を学ぶ。

研究者の場合、主目的は相手の主張を理解し自分の主張を理解してもらうあたりにある。そこで必要なのは、まず、筋道の通った主張、科学的に論理の整った意見である。いくら発音やイントネーションがアメリカ人に似ていても、論理や流れのあいまいな話ではわかってもらえない。

ネイティブスピーカーと対等に議論するには、同じように流暢に英語を話す訓練をするのではなく、自分のペースに相手を合わせさせるような「言力」を養うべきである。

往々にして、日本の研究者は英語話者と同じペースで話す訓練を優先してしまう。

言語による不公平を科学に持ち込んではいけなし、普及・定着させることは望ましくない。

日本文化を賞賛する発言も多く（それを英語や諸外国語で発信せよ）、それはしばしば偏狭な国粹主義と曲解される。しかし、「日本文化が他国のものより優れているから発信せよ」と主張しているのではない。地球上の文化の多様性を尊重しているのであり、文化多様性の維持と向上に貢献している日本を発信せよ、という主張である。

## 第2回：2月23日 13:00-17:00 統計数理研究所

13:00-13:15 趣旨説明 島谷健一郎（統数研）

13:15-14:00 言語多様性の観点からみた『英語＝国際語』観の弊害 永井忠孝（青山学院大）

14:00-14:45 「脱グローバル化」時代の到来？——政治と言語の観点から 施光恒（九州大）

15:00-15:45 遺伝研の国際化メカニズム 広海健（遺伝研）

15:45-16:30 歴史と固有性の価値：生物多様性からの視点 田中健太（筑波大菅平セ）

16:30-17:00 総合討論

コメンテータ：佐藤克文（東大海洋研）、山本誉士（総研大修了生、学振、名古屋大）

永井氏による数多くの言語の例文を用いる解説は、

- ・ 英語しか学ばない日本人はそれで逆に視野を狭くしている。
- ・ 英語が科学を記述・実践するのに優れた言語であると錯覚している。
- ・ そうした英語の関する妄想を払拭した上で英語を学ぶ方が進歩も早い。
- ・ その1助になるのが、多言語比較や第2外国語である。

などの視点を含むものだった。

しばしば「英語と日本語ほどかけ離れた言語はない。だから英語学習で日本人は不利だ」という主張を耳にする。しかし、地球には、日本語とも英語とも大きく異なる言語もあり、その言語話者から見ると、日本語と英語の共通点ばかりが目に入るに違いない。

多様な言語の具体例を提示されることで、外国語を学ぶ主要な目的が（「使う」ことだけでなく）異文化理解であることを思い出し、英語（と日本語）を客観的に見つめ直す視点を与えられた。それは科学の現場で英語を用いる際に忘れてはならないし、大きな助けとなる。

施氏は、おりしものイギリスのEU離脱、アメリカ・トランプ大統領という国際情勢を鑑み、流行語に近い「グローバル化」がそもそも何なのか、問い詰める。

まず、90年代前半まで、日本でも流行した「国際化」では、国民生活は国際社会との関係より優先し、貿易などは自国の国民生活の向上のためだった。一方、90年代後半以降の「グローバル化」は、グローバル市場に合わせて各国の国内制度や規制、商習慣まで改造すべきという発想を伴う。そこに「新自由主義」という経済政策が加わり、結果としてグローバルな投資家や企業はより稼ぎやすくなったが庶民の生活は貧しく不安定になり、格差が広がった。そして、そもそも「民主主義」「国民国家」「グローバル化」の3つは同時には成り立たないという政治経済理論も提唱された。

- ・ グローバル化が一方的に進むことはない。
- ・ 日常の言語で政治を論じることが民主主義では不可欠。
- ・ 安直な英語化は、日本語という現在は科学や政治を論じることのできる言語を、世間話しかできない言語に落としかねない。

「グローバル化」で英語は国際共通語である、の類の風聞を盲信せず、科学では英語のみを用いても日常会話は日本語だから日本語がダメになることはない、とは行かないことを認識した上で、科学者は英語とどう関わるか、考える必要がある。

広海氏は、遺伝研が授業などの英語化をどう進めてきたか、そして、「遺伝研メソッド」として教科書も編集した科学英語プレゼンテーション教育について紹介した。そのコンセプトは、研究者に必要な能力育成法を研究者が考案したもので、英語と科学的思考の両方を複合的に強化する効果を持つ。

なお、遺伝研がこの英語科学教育を確立するのに、3名で10年近くを要している。

日本ではあまり知られていないが、アメリカで学ぶ大学院生の大半は（留学生もアメリカ人も）、英語で論文を書くテクニック、科学的な文書とはどうあるべきか、どういう表現が科学論文として適切かつわかりやすいか。こうした事項を授業で学ぶ。日本の研究室では、そうした授業を受けることなく、成果が出たらいきなり英語で論文を書く院生が多い。そこでは、英語力以前に、科学における論理や思考力、その表現法が問われる。その基礎が弱いために、院生も教員も膨大な時間とエネルギーを費やすわりに、できあがる論文は（英語でなく）論理の流れがわかりにくいなどのため、却下あるいは公表されても引用されにくい。

田中氏は、稀少種の維持に力を注いだために未然に防げた（食料不足などの）危機を紹介しながら、生物多様性の価値について解説した。生物集団において、ある種が優占することは普通に見られる。ところが、特定種が（特に人の干渉により）優占し過ぎると、多種を滅ぼした挙句に自らも滅び、地球全体に災いをもたらす。

翻って現在の科学界では、英語は過度の優占種ではないか。今の諸科学において、英語の優占度をさらに強める作用のある研究体制や教育より、ほどよいバランスを保つ方向（それは全言語均等を意味するのではない。生物集団でも、種が均等に分布することは稀だし逆に不安定になりがち）を目指すほうが、科学は健全に発達するのではないか。

奇しくも、施氏の講演の中で、グローバル化の反対概念は「保護主義」や「孤立主義」ではない、3者の共存が無理ならグローバル化を不完全なものにとどめておくのが穏当な解決策ではないか、という意見が出された。これは田中氏が紹介した生物多様性における教訓と、不思議な合致を示す。

4つの話題提供は、言語学、国際政治、英語科学教育、生態学、それぞれの専門性を踏まえた異なる視点からのものだったが、日本人が抱える英語の諸問題について、不思議なほど視点や主張の重複するものだった。

## 参加者

総研大

統計科学：島谷健一郎、船渡川伊久子、伊藤聡、栗木哲、志村隆彰、三分一史和

遺伝研：広海健

極域科学：高橋晃周、塩見こずえ

学融合セ：小松睦美

先導科学：新海拓郎

核融合科学：榊原悟

国際日本研究：牛村圭

天文科学：福島登志夫、早野裕

**総研大外**

計 38 名